予言と運命の詩　―炎の章―

沖田 光海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
予言と運命の詩　―炎の章―

【Ｎコード】
Ｎ６３３５Ｕ

【作者名】
沖田　光海

【あらすじ】
予言と運命の詩　―光の章―より、１０年前……アークが大戦に勝利し、英雄と褒め称えられる少し前から、物語が始まる。
一人の青年、アークは兵士である祖父に呼び出され、帝都へ足を運ぶ。
そこで一人の不思議な少女――玲に会い、彼の運命がかわる。
若き日のラメドメンバーたちに、どつかれながら、アークは果たして、英雄になることができるのだろうか？

毎日毎日未来の大将軍フィアールと喧嘩しながらも、本当に世界を救えるのか！？

登場人物＆物語紹介

年号　第５２歴　３５年

登場人物

アーク＝レーシュ
名前　アーク
姓　レーシュ
年齢　１７
性別　男
Ｄａｔａ
炎の民の末裔である青年。　困った人は放っておけない性格。なかなかの熱血漢で少しバカっぽい性格ではあるが、頭が悪いわけではなく、人より数倍敏い。
元々は小さな村で自警団をしていたが、その腕を見込まれてラメドの長老である祖父ラウ＝レーシュの勧めで帝都へ来た。

霧亞　玲
名前　レイ
姓　キリア
年齢　１５
性別　女
Ｄａｔａ
純血のコフ。それ故に周りから差別を受けて暮らしてきた。右目が藍、左目が赤紫色の瞳を持つ。小柄で美しい顔立ちの少女。強い力を持ちながらも、人を傷つけることを嫌う。
なりゆきでアークとともに行動することとなった。

フィアール＝リクロード
名前　フィアール
姓　　リクロード
年齢　２４
性別　男
Ｄａｔａ
氷の魔女の末裔。冷気を自在に操る。アークと仲が悪く、よく衝突する。冷静な性格の反面マイペースな一面も持ち、空気を読めない（読まない）ことも……
戦後の焼け野原で拾った記憶喪失の少年セフィルを実の息子のように育てている。

セフィル
名前　セフィル
姓　　？？？
年齢　１２歳
性別　男
Ｄａｔａ
右目が赤紫、左目が紫紺のオッドアイを持つ記憶喪失の少年。
フィアールのことを心の底から慕っている。

フォンル＝リクロード
名前　フォンル
姓　　リクロード
年齢　１５歳
性別　男
Ｄａｔａ
フィアールの弟。後方支援を主に闘う。おっとりした性格で軍人に似合わない。

サラ＝フロン
名前　サラ
姓　　フロン
年齢　１７歳
性別　女
Ｄａｔａ
治癒術と攻撃術を扱う女性。異種族に対して偏見が全くと言っていいほどない。
レントに気がある様子

レント＝サフィラン
名前　レント
姓　　サフィラン
年齢　１９
性別　男
Ｄａｔａ
鋭い刃を使った一撃必殺の技を得意とする。
基本的に無表情で、感情が出ない。

プロローグ

いつか、大きなことを成し遂げたいと思っていたが、正直そんなことはできるわけがない。
成功する奴なんてほんの一部ってことはわかっている。
でも男ならだれでも憧れるんだ。
世界を救って、英雄と呼ばれて、そして歴史に名を残す。
そんな御伽噺（おとぎばなし）みたいな、夢
だからかな。
じいちゃんに、兵士として帝都へ来ないかと誘われた時、正直うれしかった
今は、異種族とニンゲンの間で戦争真っ最中。
なんでも、コフとか言う変な種族が反旗を翻して俺たちに牙をむいたらしい。
帝都の軍の兵士が足りないとかで、おれも駆り出されることになったわけだ。
ここで名をあげれば俺も、歴史に名を残すような大物になれるだろうか？
そんな淡い期待を抱きながら。

第壱幕―少女との出会い―

アークは生まれてはじめてきた帝都に驚きを隠せなかった。
「へぇ～、ここが帝都か……」
きょろきょろとあたりを見回していると一人の少女がアークにぶつかった
「ご、ごめんなさい！」
フードを目深にかぶった少女はあわててアークに謝ると、サッと走って行った。
「なんだったんだ一体？」
少女の走っていった方向を見ると、後ろから複数の人間が走ってくる音がした。
「あいつ、一体どこに行きやがった！」
「所詮子供の足、そう遠くへは行かないだろ」
「だが，すばしっこいガキだからな、どこへ行ったかわからねぇ。」
「一応ここいらをもう一度探すぞ！」
野太い男たちがアークのそばを通り抜け、走っていった。
「何なんだ？　一体？？」
どうやら、あの少女を追っているらしかった。
あの男たちの様子からすると、少女が何かをして彼らを怒らせたらしいが……。
「物騒な世の中だし、すりか何かかな？」
だが、さっき少女とぶつかった自分は何も取られていない。
「なんだろうな～、ねえ、君は解る？」
アークは数歩歩いた先の路地裏の気配へと話しかけた
『……！』
「あいつらは、うまくまいたみたいだけど、俺、君が回り道してここに戻って、そこに隠れるのを見ちゃったんだよね。」
『……』

「怖いことはしないからさ。何か話してくれない？」
『……』
しばらく2人の間に沈黙が流れた。
「本当に、何もしないよね？」
おずおずといった様子で少女は姿を現した。
相変わらず、黒いマントのフードはかぶったまま。顔が見えない。
背はアークより頭一つ分低く、マントの端から見える手足は驚くほど白かった
「君、一体なんでそんな風に顔を隠しているの？」
「それは……」
「……？」
「……か、顔に醜いやけどを負って、それで……」
さっと、少女は視線をそらした。
どうやら嘘をついているらしいが、アークは気にせず、次の質問を言った
「何で追いかけられていたの？」
「……」
「何か悪いことでも、した？」
「していないわ！」
少女はきっぱりといった。
「ただ、私は買い物をしに帝都（ここ）に来ただけで」
「そう。」
さてどうするべきか……。
このまま少女を解放したところで何か解決するわけではない。
それ以前にアークはこの少女に興味を持っていた
（でも、どうしようかなぁ～）
天を仰ぎ考えたそのとき。
「アーク！」
自分の名を呼ばれ、そちらを振り向くとそこには
「じいちゃん！　……どうしてここに？」

「どうしても何も、お前がいつまでたっても待ち合わせの場所に現れんから探しに来たんじゃい！」
「あ～、ごめん」
「ほれ、いくぞ！」
アークの祖父はアークの耳を引っ張り無理やり連れて行こうとした
「いでででで！　ちょっとまって！」
「なんじゃ！」
祖父の言葉にアークは無言で少女を指差した。
「あの子は？」
「俺のツレ」
「どういうことじゃ？」
祖父の言葉に、アークは笑顔で答えた。
「旅人みたいでさ。　道中危険だろうからって一緒に来たんだ」
「ほう。　それでどうするつもりだ？」
「腕には自信があるみたいだし、城のほうで置いてくれないかな？」
その言葉に祖父ははあと大きなため息をついた
「お前といい、あいつといい……帝都の軍は託児所じゃない」
「……は？」
「まあ、いい。　とりあえずついてこい」
「？……うん」
アークは少女の手を引くと祖父の後について行った。

第弐幕　―玲―

案内された部屋に二人きりにされたアークと少女
少女は怪訝そうにアークを見つめた
「あんなあんなこといっていいの？」
「は？」
「私の腕とか……」
「君が普通の兵士以上に戦闘に特化しているのはもう気づいているけど？」
「……っ！？　どうして？」
「身のこなしとか、纏っている雰囲気とかでだいたいわかるもんだけど？」
「……あんた、ただ者じゃないわね」
「うん。よく言われる」
始終表裏のないニコニコとした笑顔の青年を少女は少し警戒しながらみていた
「……そんなに警戒しないでよ。　俺人畜無害な心優しい青年だよ」
「……本当に人畜無害な人は自分からそういわないわ」
「手厳しいなあ。　それより早く名前教えてくれたら、うれしいんだけど」
「え？」
「だから名前。　いつまでも君とかお前とかじゃいやだろ」
「……玲」
「レイ？」
「霧亜玲」
「キリア・レイ？　……東国みたいにファミリーネーム《苗字》が先なのか？」
「ええ。　私、あっちのほうの出身だから。」

「そうか。俺はアーク＝レーシュ。　気軽にアークって呼んで」
「……アークはどうして私をここまで連れて来たの？」
玲は率直に自分の疑問をぶつけた
「なんとなく放っておけなかったから」
「ナニそれ？」
あきれたように玲は言った
「放っておけなかったって……私そんなに非力じゃないわよ」
「じゃ、なんとなく運命的なものを感じたから、かな？」
「……そんなナンパはもう古いわよ」
「なんだよ、それ」
むっとした表情でアークは言った。
「本当になんか玲にそう言ったものをかんじたんだぞ」
「そう。」
頷いてみるも玲は全く信じていなかった。
本当のことなのになあ、とアークが呟いて見るも無視だ。
「……ところでフード暑くない？」
「別に、平気」
「名前まで言ったら素顔も見せてくれたっていいじゃないか！」
「勝手な男ね」
「せっかく助けてやったのに」
「頼んでなんかいないわ」
「でも、そのままじゃ怪しまれるって！　とれ」
ぐいとアークはマントを引っ張って例からそれを奪った。
フードの下の顔にアークは息をのんだ。
それほど、美しい少女だったのだ
漆黒の黒髪は窓からこぼれる日の光を反射してわずかに青く輝く。
真っ白い肌は肌荒れできもの一つなく、白く滑らかだ。
桜色の唇に、整った鼻筋。
どれもが完璧な配置を施しており、まるで神が作った人形のよう。
何より目を引いたのは左右違う色の瞳。

右目が藍、左目が赤紫のオッドアイ。
大きな瞳はよほど自分の姿を見られたことが嫌なのかわずかにうるんでいる。
「……綺麗」
ぽつりとアークは玲に呟いた。
その声を聴き、目を見開いた
「な、何言っているのよアンタ！　……大体の人間は人と違う私の姿を気持ち悪いっていうのに。異民族の私を嫌だっていうのに」
「なんだそれ？　俺はきれいだと思うよ。　まるで村の境界にあった天使の絵みたいだ」
「なにそれ？」
少女は小さく笑った
「……お、やっと笑った。　なんだ意外とかわいい顔もできるんだ」
その言葉に玲は顔を赤面させた。
「な、なにそれ？　からかってんの？」
「からかってないって。　それにもったいないよ。せっかく美人でかわいいのに顔を隠すなんて」
「アンタバカ？　オッドアイの人間なんて大抵が異民族。　今帝国が闘っているのは異民族たちが反旗を翻した反乱軍よ！」
「ああ、知っているよ」
アークはあっさりと答えた
「でも君は違うだろ？」
「あなたをだましているのかもしれないのに？」
「君が嘘をついているようには見えないよ」
驚くほどきっぱりとアークは言った。
そんな彼に玲は小さくバカじゃないのと呟いた。

第参幕　―フィアール―

アークは祖父に言われて少し広い部屋へと案内された。
玲はどうしようか？
祖父は自由にしていいといったので、アークは玲に声をかけたが、彼女は
「いかない」
そうきっぱりと言った。
どうやら、彼女は部屋を出たくないらしい。
あんな様子で玲は大丈夫なのだろうかと考えたが、本人からしてみれば大きなお世話だろう。
それともう一つ。
廊下であった彼のこともアークには悩みの種だ。

「ラウ殿、その人は？」
祖父の後をついて言っていると一人の男に声をかけられた。
銀髪に赤い瞳を持った長身の青年だ
「おお、フィアか。こいつは先日話しておったわしの孫じゃ」
祖父―――ラウは簡単にアークの紹介をフィアと呼んだ男にした
「ああ、君が……。　私はフィアール＝リクロードだ。　精々死なないようにがんばってくれ」
それだけ言うと、フィアールはさっさとどこかへ行ってしまった
「やっぱり、まずかったかのう……」
小さくラウは呟いたが、アークに聞こえてはいなかった。
初対面で最悪な印象を持った男―――フィアールをじっと睨んでいたからだ。

ここにいるのがラメドのメンバーじゃ

ラウはアークに数枚の顔写真を見せた。
「こ奴はフォンル＝リクロード。さっき廊下ですれ違った男――――フィアの弟じゃ」
「ふんふん」
「いかつい男がジーモン＝ベッカート、この女はサラ＝フロン、そして釣り目の男はレント＝サフィラン、軽そうな奴はクルト＝ファヴァレットじゃ」
「い、一日で覚えるのか？」
アークは彼らの大まかな特徴を書いた紙を見ながらラウに聞いた。
「そうじゃ。ラメドはわしも含めてたった7人。　そうむずかしいことではあるまい」
「げえーーー」
嫌そうにアークは呟いた。
だが、まあ仕方がない。
味方の顔を覚えて戦闘で不利になることはないだろう。
「まあ、覚えるしかないか～」

紙と写真を部屋に持って行ってアークはそれをずっと眺めていた。
「なにそれ？」
「ラメドのメンバー」
「面白いの？」
「これくらい覚えていなくちゃここじゃやっていけないんだよ」
「ふーん」
玲は興味なさそうに呟いた。
その間、彼女は自分の荷物の中から一冊の本を取り出した。
題名は……
『Ｕｔｏｐｉａ』
それを見てアークは玲に聞いた
「なにそれ？」
「本」

「面白いの？」
「全然」
言ってから玲は本を投げてよこした。
その本は古代語で書かれていた。
「えーと何々？　“壱百の宝玉……楽園”？？」
「へえ、アンタ古代語が読めるんだ」
「少しならね。　でもよくわからない。　……ところで壱百の宝玉って何？」
「これよ」
玲は胸元から一つのペンダントを取り出した。
「ふつうは武器につけられている宝石。　人の魔力を高めてくれるものよ」
「……なんでそれと楽園が関係あるんだ？」
「楽園とは創造の力。　神の力のこと。　数年前までこれを奪い合っている奴らがいたみたいだけど、反逆軍があちこち荒らしまわったせいで、宝玉の情報もかなり消失しちゃったみたい。　私だって、本物はこれ以外見たことないもの」
そう言って玲は苦笑した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6335u/

予言と運命の詩　―炎の章―

2011年11月20日19時32分発行